

# 多文化を ささえる 人びと

# ことばに仕事をあたえる 多言語センターFACIL

阪神淡路大震災のあとに始まった多くの外国人支援活動にユニークな組織が加わった。多言語センターFACILは、ことばの翻訳・通訳サービスに適正価格をつけることで、外国人支援組織の運営基盤を固め、同時に移民のことばに資産的価値を創出する。

庄司 博史  
民博民族社会研究部

言語学・言語政策論。2004年に特別展「みんなで二ホン」を企画した。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共編著書に『多民族二ホン』(2004年)、『事典 日本の多言語社会』(2005年)など。

一九九五年の阪神淡路大震災は、民間の外国人支援活動にとって大きな転換期となつた。震災をきっかけに、情報不足にあつた多くの外国人の存在が浮かび上がつた。日本人でさえとまどつ混乱のなかで、なにが起つたのかも、どこに支援があるのかもわからぬまま、多くの外国人が不安の真つただなかにあつた。これにいち早く救いの手を差し伸べようとする動きがはじまつた。民間のボランティアの人たちであつた。震災の中心地神戸市でも、いくつもの善意が形となつてあらわれた。

神戸市西部に位置する長田区周辺は、地震のダメージのもつとも大きい地区のひとつであった。下町にあるカトリック鷹取教会（現・たかとり教会）周辺も多くの家屋が倒壊し燃え落ち、避難場所や情報を求める被災者であふれた。教会ととかわりのあつた周辺のベトナム人の多くも、

FACILの設立は、それまでの外国人支援活動の空白を補うものであつた。

九〇年代に入り外国人の増加とともに、行政の広報や案内などの多言語化のニーズがたかまり、個人が申請書などさまざまな書類の翻訳を必要とする機会も多くなつた。しかし、ベトナム語、タガログ語など、日本でなじみの少ない言語を請けおくる翻訳・通訳者は皆無に近く、いたとしても法外な費用がかかつた。やむをえず依頼した結果、間違いだけの仕事がもどつたこともあつた。依頼者側にも問題があつた。當利目的でないという理由でタダ同然で依頼

できるという誤解は根強いものであつた。

## 移民言語がささえる コミュニケーション・ビジネス

吉富さんは、このような需要をベースに、外国語能力を活用した翻訳・通訳サービスをたちあげ、それでようとした。外国人にとつても、日本社会から援助をうけるばかりではなく、社会参加しながら自立できるという自信につながりうる。外国人を支援する組織にとつても、経済基盤を確立できる可能性を示す機会でもあつた。それまで数々あつた支

援組織は、善意とはいえ、マネージメントを他からの援助に依存したために、現われては消えるという現象を繰り返してきた。

当初、それまでの活動でかかわつた人びと七、八〇名に登録してもらいたいスタートした事業は、現在登録者約五〇〇名、対応可能な言語はペール語やビルマ語など二八にのぼる。これらのネイティブ話者も少なくない。ほそぼそとはじめた事業ではあつたが実績は伸び、いまや民間の業者にも大いに意識される存在となつた。

設立から一〇年を経過し、多様な分野の仕事に対応するなかで翻訳を

その中に含まれていた。

多言語センターFACILの創設者吉富志津代さんは、たまたまそれまで参加していた教会でのボランティア活動が縁で被災した外国人とかかわり、救援にめりこんでいつた一人である。

## 情報難民を生み出す ことばの壁

震災後の復旧が進み、当面の生活環境が整うなか、外国人の抱える深刻な問題が明らかになつた。彼らの多くは日常生活において社会にほどんど注目もされず、生活情報から切り離された人びとであつた。主な原因は不十分な日本語能力にあつた。日々の暮らしにおわれる彼らには、学生のように日本語学習に費やす時間や経済的余裕はない。役所の提供する保健や医療サービス、子どもの学校との連絡のやりとりで自由する人は少なくない。

## 移民とともに増える 移民言語の通訳・翻訳の需要

FACILの主な活動は、一口でいうと外国語の通訳や翻訳事業である。このようなサービスをおこなう

震災後、各地でこうした外国人を

支援する組織がうまれ、自治体にも多言語による行政サービスの動きが見えはじめた。鷹取救援基地と呼ばれたカトリック鷹取教会の敷地にも外国人を支援しようとする人びとがあつまり、多様な活動がなれば手探り状態で展開しつつあつた。多くの人にとつて、ボランティア活動 자체はじめての経験であつたし、多言語ラジオ放送、多言語による医療相談や生活相談など、ほとんどの事業はかつて存在すらあまり知られていないものであつた。そのひとつに、吉富さんが一九九九年の創設以来かかわっている多言語センターFACILがある。

震災後、各地でこうした外国人を支援する組織がうまれ、自治体にも多言語による行政サービスの動きが見えはじめた。鷹取救援基地と呼ばれたカトリック鷹取教会の敷地にも外国人を支援しようとする人びとがあつまり、多様な活動がなれば手探り状態で展開しつつあつた。多くの人にとつて、ボランティア活動 자체はじめての経験であつたし、多言語ラジオ放送、多言語による医療相談や生活相談など、ほとんどの事業はかつて存在すらあまり知られていないものであつた。そのひとつに、吉富さんが一九九九年の創設以来かかわっている多言語センターFACILがある。

## 移民とともに増える 移民言語の通訳・翻訳の需要

FACILの主な活動は、一口でいうと外国語の通訳や翻訳事業である。このようなサービスをおこなう



2007年に改築される前のたかとり救援基地とたかとり教会



被災地で暖をとる鷹取救援基地関係者

地域で暮らすうえで必要な情報を各國語で提供する事業にも協力してきた



震災後に開設した多言語ラジオ放送でスペイン語放送を担当する吉富志津代さん

FACILの活動がいかに画期的であつたか。まず、外国人の自立を支援すること、そしてマイナーライ語の翻訳・通訳サービスに適正価格をつけたことである。これにより、日本では話者にも軽視され日陰の存在であつた移民言語に、いくばくかの資産的価値を創出した。かれらの子どもたちに自信をあたえる可能性に注目すべきである。

多様性の保護をただ叫ぶより、仕事を用意するほうがよほど活力につながることは、移民のことばについてもいえるようだ。